

# イエス・キリストの啓示 - 第五

イザヤ書 四十章：慰めよ、慰めよ

Jeff Pippenger

2023-10-25

イザヤ書40章の最初の十七節では、世界が喜んでいる間、彼らを通りて死んだまま横たわっていた三日半の終わりの時点に、十四万四千人が預言的に位置づけられている。すべての預言者は互いに一致しており、彼らが示す預言的な出来事は常に他の預言者のものと一致している。なぜなら、神は混乱の神ではないからである。

そして、預言者の霊は預言者に従う。神は混乱の神ではなく、平和の神である。これは聖徒たちの諸教会すべてにおいても同じである。コリント人への第一の手紙 14:32, 33.

イエスをご自身の不在の間に遣わすと約束された慰め主は、イザヤ書の最後の預言的叙述を成す二十六章の、まさに最初の節の冒頭の言葉の中に込められている。「慰めよ、慰めよ、わが民を、とあなたがたの神は仰せられる」。初出の法則は、続く二十六章が慰め主の到来の完全かつ最終的な成就に照らして理解されるべきであることを強調している。

わたしは父に求めます。そうすれば父は、もう一人の助け主をあなたがたにお与えになり、その方がいつまでもあなたがたと共にいるようにしてください。しかし、助け主、すなわち父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに語ったすべてのことを思い起こさせてください。ヨハネによる福音書 14:16, 26.

ミラー派の歴史における真夜中の叫びは、十四万四千人の歴史において繰り返される。

邪悪のうちに、欺きと迷妄のうちに、死の陰そのもののただ中に横たわる世界がある—眠っている、眠っている。彼らを目覚めさせるために、魂の産みの苦しみを感じている者は誰か。どんな声か。彼らに届きうるのか。私の思いは、合図が発せられる未来へと運ばれた。「見よ、花婿が来る。出て彼を迎えよ。」しかし、彼らのともしびを補うための油を手に入れるのを遅らせた者もいて、あまりにも遅くなってから、油によって表されている品性は譲り渡すことができないのだと知るであろう。『レビュー・アンド・ヘラルド』1896年2月11日。

こう問われる。「どんな『声』が『眠っている』者たちを『目覚めさせる』ことができるのか？」イザヤ書四十章で彼らを目覚めさせる「声」は、「荒野で」「叫ぶ」「声」である。

エルサレムに慰めの言葉を語りかけ、彼女に向かって叫べ。「彼女の戦いは終わり、彼女の咎は赦された」と。というのは、彼女はそのすべての罪のために、主の御手から二倍を受けたからである。荒野で「叫ぶ」者の「声」... イザヤ書 40:2、3.

真夜中の叫びのメッセージは、後の雨のメッセージでもある。

「あなたがたは主の再臨をあまりにも先のことと考えすぎている。私は、後の雨が真夜中の叫びのように[突然に]降り、その力は十倍であったのを見た。」 Spalding and Magan, 5.

神の御言葉の中に見いだされる、後の雨のメッセージを表す数多くの象徴の一つが、語や句の重複によって認識される象徴である。語や句の重複は、終わりの時における真夜中の叫び、すなわち後の雨のメッセージの象徴である。「慰めよ」の重複という象徴は、イザヤ書40章の冒頭を、十人の乙女のたとえの真夜中の叫びとして表されるメッセージが認識され、その後には宣べ伝えられるべき遅れの時に位置づける。その時、キリストは眠っている乙女たちを目覚めさせるために慰め主を遣わされる。彼女たちは予言的に眠っている者として、また一部の預言箇所では死の眠りに就いている者として描かれている。イザヤ書40章1節は、2020年7月18日の失望の出来事の「後」、象徴的な三日半の時点に予言的に位置づけられる。というのも、その時こそ、眠っている者たちを目覚めさせるために慰め主が遣わされるからである。三日半は荒野の象徴であり、そこでこそ「声」が「叫び始める」。

黙示録11章、エゼキエル書37章、マタイによる福音書25章、そして、あらゆる改革運動において繰り返し現れるのと同じ道標を伴うミラー派の歴史が結びついて、眠っている乙女たちを目覚めさせる「特定の過程」を示している。この過程は、失望に際して乙女たちが眠り込むことから始まる。失望から始まったその期間は、やがて「遅れの時」であると認識される。遅れの時の最後の部分は、「真夜中の叫び」のメッセージが形成されていく段階である。そのメッセージが確立されると、それは宣べ伝えられ、やがてその頂点である裁きに至る。

イザヤ書で「声」として描かれている使者は、何を告げ知らせるべきかを尋ねた。彼は象徴的な言葉で、イスラム教のメッセージを提示するよう告げられた。イスラム教の予言的メッセージは、間もなく到来する日曜法と切り離すことはできない。というのも、イスラム教はラッパの勢力であり、『黙示録』の七つのラッパは、日曜法を制定する諸勢力に対する神の裁きを表しているからである。それらの勢力とは、321年の異教ローマ（竜の象徴）、538年の教皇ローマ（獣の象徴）、そして間もなくアメリカ合衆国で制定される日曜法（偽預言者の象徴）である。

荒野で叫んでいた「声」が何を告げるべきかを特定することに関連して、神の言葉は決して失敗しないという約束があった。神の言葉は決して失敗しないという「約束と確信」は、ハバクク書二章三節で次のように表現されているのと同じ予言的状況に置かれている——「終わりにはそれは語り、偽らない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。」イスラムのメッセージは決して失敗しない。必ずやって来る。イザヤ書四十章の最後の節は、ハバクク書の幻を待つ者たちに向けられている。

しかし、主を待ち望む者は新しく力を得る。鷲のように翼をはって上り、走っても疲れず、歩いても弱らない。イザヤ書40章31節。

いま封印が解かれつつある「七つの雷」の「隠された歴史」は、失望で始まり失望で終わる三つの道標を示している。その象徴的な歴史には、二つの期間によって区切られた三つの道標がある。失望によって「遅れの時」が始まる。この「遅れの時」は、真夜中の叫

びの是正されたメッセージとその予告へと導く。真夜中の叫びのメッセージは、そのメッセージを宣べ伝える期間を開始し、やがて裁きとして表される第二の失望へと至る。この二つの期間によって区切られた三つの段階は、ヘブライ語の「真理」という語の構成に見られるとおり、アルファとオメガを表している。

エゼキエル書37章において、エゼキエルはイザヤ書40章の「声」をも表している。イザヤ書40章の声は、「何を叫ぼうか」と問う。そして、エゼキエル書37章7節の「声」は、「命じられたとおりに」「預言した」。

それで、わたしは命じられたとおりに預言した。わたしが預言すると、音がして、見よ、震えが起こり、骨と骨が寄り集まって、それぞれの骨に組み合わさった。わたしが見ていると、見よ、その上に筋と肉が生じ、さらに皮膚がそれらをおおった。しかし、彼らのうちには息がなかった。エゼキエル書 37:7、8

エゼキエルの最初の預言は、骨と肉を結び合わせたのが、まだ命は宿っていなかった。「それで、」エゼキエルは二度目に「命じられたとおりに」「預言した」。第二の預言は、それらの体に命を与えた。この二つの預言は、アダムの創造によって象徴されている。

そして主なる神は地の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れた。こうして人は生きる者となった。創世記 2章7節。

死んで干からびた骨に命を与える二段階の過程は、アダムの創造において最初に言及されており、神の預言の言葉がまた神の創造の力でもあることを強調している。神はまずアダムを「形づくり」、エゼキエルの最初の預言が骨と体を一つにし、その後、神は「その鼻に命の息を吹き入れ、人は生きる魂となった」。

エゼキエルの第二の預言は「骨」にではなく「風」に向けられていた。彼は「風に向かって言え」と告げられ、「四方の風よ、来たれ。息よ、この殺された者たちの上に吹きつけ、彼らが生きるように」と言うよう命じられたのである。死人のからだを生き返らせて大いなる軍勢とするこの第二の預言は、死体に対してではなく、風に向けて語られた。すなわち、風に、からだの上に息を吹きかけよと命じるものであった。神の御言葉の中で「息」という語が最初に言及されるのはアダムの創造のときであり、そこでそれは命の息として定義されている。そして、死んだからだに命をもたらすものは四方の風から来る。

天使たちは四方の風を押さえている。それは、つなぎを断ち切って全地を駆け抜け、その行く先々に破壊と死をもたらそうとする怒れる馬として表されている。

「永遠の世界のまさに瀬戸際で、私たちは眠っていようというのか。私たちは鈍く、冷たく、死んだままでいようというのか。ああ、私たちの教会に、神の霊と息がその民に吹き込まれ、彼らが自らの足で立ち、生きることができますように。」『Manuscript Releases』第20巻、217頁。

ここでの二つの問いは、「私たちは眠るのか」と「私たちは死んでいるのか」である。…同じ予言的状态を指す二つの表現である。天使たちによって抑えられている四つの風のメッセージは、神の息が死者に入り、彼らを立ち上がらせて生かすメッセージである。四つの風のメッセージとは、イスラムの怒れる馬のメッセージである。ヨハネの黙示録における四つの風のメッセージは、封印のメッセージである。ヨハネの黙示録7章1～3節の封印

のメッセージは、神のしもべたちに印が押されるまで四つの風が抑えられていることを示すメッセージである。

この後、わたしは四人の御使いが地の四隅に立ち、地の四つの風を押さえて、風が地にも海にも、またどの木にも吹きつけないようにしているのを見た。さらに、日の出る方から上って来る別の御使いを見た。彼は生ける神の印を持っており、大声で、地と海に害を加える権威を与えられている四人の御使いに叫んで言った。「わたしたちが、わたしたちの神のしもべたちの額に印を押し終えるまで、地にも海にも木々にも害を加えてはならない。」ヨハネの黙示録 7:1-3

エゼキエルの第二の預言は風に向けられており、その風が身体に与えた命は四方の風のメッセージから来た。エゼキエル書37章8節から10節では、「風」または「息」として現れる語は、いずれも同じヘブライ語である。神はアダムに命の息を吹き込まれ、エゼキエルにおいては、その命の息は四方の風から来る十四万四千人の封印のメッセージである。そのメッセージは、第一のメッセージによって死の谷に集め合わされた身体に、神の創造の力を届ける。四方の風のメッセージとは、イスラムが日曜法のゆえにアメリカ合衆国に裁きをもたらすというメッセージである。これは真夜中の叫びのメッセージである。

七つの雷の隠された歴史は失望から始まり、それによって待機の時が始まる。黙示録11章において、2020年7月18日に二人の預言者が殺されたとき、待機の時が始まった。主がエゼキエルに、通りで死んでいる二人の証人が生き返ることができるかどうかを問われたとき、エゼキエルは死者の中にいた。

主の手が私の上であり、主の霊によって私は連れ出され、骨で満ちた谷の真ん中に置かれた。主はまた、私にそれらの周囲を巡らせさせた。見よ、谷の平地には非常に多くの骨があり、しかもそれらはひどく乾いていた。主は私に言われた、「人の子よ、これらの骨は生きることができるか。」私は答えた、「主なる神よ、あなたがご存じます。」エゼキエル書37章1-3節。

7節で、エゼキエルが二つの預言のうち最初のを告げるとき、その伝えたことばは、ただこうであった。「乾いた骨よ、主の言葉を聞け。」ヨハネは黙示録にこう記している。「この書の預言のことばを聞く者は幸いである。」エゼキエルは、死んで乾いた骨を、「主の言葉を聞け」という自らの命令に耳を傾ける者として描いている。彼らは祝福されている。そして、主の言葉は真理である。エゼキエル書2章には、神の言葉を聞く者の経験が記されている。

彼は私に言った。「人の子よ、立ち上がれ。私はあなたに語ろう。」そして彼が私に語ったとき、霊が私のうちに入り、私を立たせ、私は私に語りかける彼の声を聞いた。エゼキエル書 2:1、2。

ヨハネの黙示録11章で、死体が主の御言葉を聞くと、慰め主が彼らの内に入り、彼らは自分の足で立ち上がる。彼らを自分の足で立たせるのは慰め主である。

三日半ののち、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは立ち上がった。彼らを見た者たちには大きな恐れが臨んだ。黙示録 11:11

死者が立ち上がることは、彼らを墓から引き上げ、日曜法の裁きにおいて掲げられる旗印となるための、二段階の過程の第一段階である。第十一章で彼らが立ち上がると、彼らを見た者たちの上に「大いなる恐れ」が臨む。

彼は恐れて自分の堅固な砦に退き、彼の君たちは旗印におののく、と主は言われる。  
主の火はシオンにあり、その炉はエルサレムにある。イザヤ書 31:9

ミラー派の歴史における真夜中の叫びのメッセージは、第二の天使のメッセージの第二部であった。第二の天使のメッセージは、当時バビロンの娘たちと見なされた諸教会からミラー派を分離させ、忠実な者たちは出て来てミラー派と共に立つように召し出された。そのメッセージによって、信仰者の「からだ」が形成され、次いで第二段階として、第二の天使のメッセージに結び付き力を加える真夜中の叫びのメッセージが与えられた。こうしてミラー派は、津波のようにそのメッセージを全土に運ぶ強大な軍隊となった。この二段階の過程こそが黙示録18章の二つの声であり、また、エゼキエル書にある干からびた死んだ骨の復活、すなわち黙示録11章の通りで打ち殺された者たちの復活と同一の過程である。

天からの力強い天使を助けるために天使たちが遣わされ、至る所で響き渡るかのような声を私は聞いた。「わが民よ、彼女から出て来なさい。あなたがたが彼女の罪にあずからず、また彼女の災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を思い起こされた。」このメッセージは第三のメッセージに付け加えられ、それに結びつくもののように思われた。ちょうど1844年に真夜中の叫びが第二の天使のメッセージに結びついたのと同様である。Spiritual Gifts, 第1巻, 195, 196.

七つの雷の隠された歴史における最初の道標は、待機の時の始まりとなる失望である。待機の時は三日半として表される期間であり、それは荒野の象徴である。荒野をさまよう四十年の終わりに、ヨシュアは強大な軍勢を率いて約束の地へ入った。三日半の終わりに、エゼキエルは死の谷へ連れて行かれ、死体に「主の言葉を聞け」と命じるよう告げられる。エゼキエルは、荒野で叫ぶ「声」である。主の言葉を聞けとの命令は、からだの部分を一つに集めるが、彼らはまだ生きておらず、まだ軍勢でもなく、まだ印を受けていない。エゼキエルが第二章で語る「主の言葉」は、助け主が到来するとき、神の民が主の言葉を聞くのと同時に立ち上がることを示している。キリストは、彼らが通りで殺されてから三日半後に、助け主を遣わすと約束された。

まだ「生きていない」からだが一たび立ち上がると、第二の預言が与えられることになる。イザヤ書の「荒野で叫ぶ者の声」は、自分が何を叫ぶべきか、その預言は何かを問う。エゼキエルとイザヤ書四十章の「声」の双方に伝えるよう命じられている「メッセージ」は、イスラムのメッセージである。その預言が告げられると、「アダム」は強大な軍勢として命を得る。すると、生きて二人の証人が、間もなく可決される日曜法を理由に、アメリカ合衆国に対するイスラムの裁きのメッセージを宣言する。日曜法の裁きは、七つの雷の隠された歴史における第三の道標である。それが成就すると、その軍勢は天への旗印として掲げられ、黙示録十四章において表される。

私は第一、第二、第三の天使のメッセージにおいて経験をしてきました。天使たちは、天の中天を飛び、世に警告のメッセージを宣べ伝え、この地球の歴史の終わりの時

代に生きる人々に直接関わるものとして表されています。これらの天使の声を聞く者はいません。というのは、彼らは、天の全宇宙と調和して働く神の民を表す象徴だからです。神の御霊によって照らされ、真理によって聖められた男女が、三つのメッセージを順序どおりに宣べ伝えるのです。『選ばれたメッセージ』第2巻、387頁。

掲げられた旗印は、中天を飛ぶ第三の天使であり、人類に獣の刻印を受けるなと警告している。力強い軍勢は、ミカエルが立ち上がり、人類の猶予期間が閉じられるまで、そのメッセージを世界に伝え続ける。

これらの考察は次回の記事で続けます。

真夜中に、「見よ、花婿だ。彼を迎えに出なさい」という叫び声がした。マタイによる福音書 25章6節